

李義養筆「倣谷文晁画」について—田原市博物館蔵『画学斎図藁』を手掛かりに—
片山真理子（京都工芸繊維大学大学院）

朝鮮後期に活躍した画員・李義養（1768～？）が描いた作品のうちに、款記「倣谷文晁画」をとまなう山水図が3点確認できる。1点は〈富士に蓬莱山図〉（釜山博物館）であり、あとの2点は同じ原画をもととする〈山水図〉であり、泉屋博古館と釜山博物館が所蔵している。そして、両作品の原画と見られる山水図の縮図が田原市博物館蔵『画学斎図藁』（以下「田原市博本」）に含まれていることが、近年報告された。しかし、現状では、田原市博本についての検討は十分とは言えない。また、金正喜（1786～1856）による詩集『覃挈斎詩藁』における谷文晁（1763～1840）についての記載と田原市博本を併せて検討する必要があると考える。

『画学斎図藁』とは、文晁による古画や風景、彫像などのスケッチおよび、絵の形態や注文主の名など、制作にかかわる情報を収録した資料である。180丁を超える冊子本であり、同様の資料としては、写本や版本が東京藝術大学附属図書館や大東急文庫、個人蔵などいくつか知られている。収録されている記事は文化9年（1812）1月から7月のものであり、朝鮮通信使来日の翌年にあたる。文化8年の朝鮮通信使は、日本・朝鮮両国の経費削減のため、来日を対馬までとする易地聘礼策がとられた。一行は対馬に3月13日から6月25日までの間滞在し、李義養も画員として随行した。その際に接待役として儒官古賀精里や三宅橘園らが対馬府中に集められたが、文晁はメンバーに含まれてはいなかった。

田原市博本には「壬申正月 谷文晁再拜 李信園画伯座下」と締めくくられた文晁から李義養へ宛てた手紙の控えがあり、贈答品目に関する事項を書き連ねている。それによると、文晁が描いた山水図1幅は「拙く不足」であるため、『名山図譜』3巻や『漂客奇賞図』1巻、『名公画譜』4巻、兔穎（絵筆）10枝、陳玄（墨）2笏も副えて送るとされている。そして、それに続けて縮図形式で筆写された山水図が13図、梅枝図1図、富士山図扇面1図が収録されている。縮図形式で描かれた山水図のうちの1図は釜山博本と泉屋博本が原画として写した山水図の縮図と判断できるものである。

本発表では、文晁の手紙の文意を読解し、それを手掛かりとして3点の李義養筆「倣谷文晁画」について検討する。結論としては、款記「倣谷文晁画」は、贈答品受け取り、受贈した絵筆や墨を用いて制作したという文晁への返答であったと考えたい。その点で、田原市博本は、朝鮮通信使研究および画人の交流を示す基礎史料として位置付けられるであろう。さらに、田原市博本の存在により、最後の朝鮮通信使が来日した後にも画人の交流が展開していることが明らかとなる点も指摘したい。